

皮膚科のトリビア

239

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」,そこから転じて「瑣末なこと」となり,今では雑学的知識,豆知識,などを意味する言葉として定着している。

本欄は,小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ,連載しています。ご意見等ございましたら,ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●アトピー性皮膚炎治療研究会第29回シンポジウムから

令和6年2月4日

アスピリン中止で改善した高齢者のアトピー性皮膚炎

70歳の男性。10年ほど前からアトピー性皮膚炎の診断のもと,加療を続けているが難治。紅皮症化したため生物学的製剤導入目的で紹介受診。EASI 39, WBC 12,300/ μ L, 好酸球28%, IgE 295 IU/mL, TARC 28,290。デュピルマブを投与したが改善に乏しく,53週で中止。好酸球増加も改善せず,薬剤との関連を疑った。長期間内服していたアスリピン,アムロジピン,オルメサルタン,アトルバスタチンの薬剤誘発性リンパ球刺激試験(drug-induced lymphocyte stimulation test: DLST)はすべて陰性。アスピリンを中止したところ,皮膚症状,好酸球数はともに改善した。

一言コメント

「TARCとIgEが乖離していて好酸球増多がある症例では薬剤を疑う必要がある。高血圧に対するカルシウム拮抗薬,アンジオテンシンII受容体拮抗薬は皮膚科を受診する高齢者の多くが内服している。アトピー性皮膚炎的な慢性湿疹のほか,丘疹紅皮症や多形慢性痒疹の原因にもなっているのではないかと疑うが,長期投薬中だとなかなか中止を依頼することがむずかしい。貴重な症例だった。」

●アトピー性皮膚炎治療研究会第29回シンポジウムから

令和6年2月4日

コルネオトーシスとは

表皮顆粒層は3層に分かれており,タイトジャンクションの上に位置する顆粒層最上層のSG1細胞が細胞死をおこし機能的な角層バリアを形成する。SG1細胞の細胞死では,カルシウムイオン(Ca^{2+})濃度が上昇した後,1時間程度の時間(フェーズ1)を経て,高 Ca^{2+} を保ったまま,pHが中性から弱酸性に酸性化すること(フェーズ2)が,核やミトコンドリアなどの細胞小器官を消すために必要な過程であることを発見し,この特別なSG1細胞死を「コルネオトーシス」と命名した。これはヒトに限らず,すべての陸上脊椎動物の生存に関わっている重要な現象である。

一言コメント

「赤血球と同様に,死んだ細胞を材料としてそれを上手に活用する仕組みの1つ。細胞内 Ca^{2+} とpHが弱酸性→酸性→中性と変化する様子をライブイメージングでみせてもらった。」

●保土ヶ谷区医師会学術講演会から

令和6年2月19日

心不全の定義とBNP

心不全の国際的な定義は,現在または過去に「器質的・機能的な心臓の異常を原因とする症状や徴候があること」に加えて,「BNP高値」ないし「肺また

は全身のうっ血の客観的証拠」が2021年に追加された。BNP[脳性(B型)ナトリウム利尿ペプチド]は壁の進展や圧上昇などのストレスにより心室から分泌されるホルモンで、BNPはそれ自身が血管拡張作用、尿排出促進作用により、心臓へのストレスを軽減させる生理作用をもっている。したがって、その値の上昇は「心臓に負担がかかっている」状況を鋭敏に反映しており、「心不全」を診断するうえで有用な指標になった。BNP 35 pg/mLないしNT-proBNP 125 pg/mL以上では心不全の可能性がある、BNP100 pg/mL・NT-proBNP 300 pg/mL以上では現在心不全と考えてよく、さらにBNP200 pg/mL・NTpro-BNP 900 pg/mL以上では近い将来に心不全悪化による入院などの必要性が生じる高リスク心不全である可能性が高い。

一言コメント

「下肢の浮腫を呈する高齢者をみるが多くなった。BNPの上昇と器質的心不全を疑う症状があれば、循環器専門医に紹介するべきとのことであった。」

●神奈川県皮膚科医会第171回例会から

令和6年3月3日

ゼロノナイト®ゴキブリ・トコジラミ用が最強

トコジラミ駆除に必要な対策として、プロフラニリドを有効成分とするゼロノナイト®の使用を勧める。従来の殺虫剤(ピレスロイド系)抵抗性のトコジラミにも効果がある。燻煙式ないしワンプッシュ式がある。プロフラニリドは光や熱に強く、部屋の隅々まで広がり、壁や床に付着して長期間残り続け、そこを通った虫に付着して死滅させる。即効性はない。ペットがいても問題なく使用可能。

一言コメント

「ペストコントロール業者に頼むと1部屋数万円の費用がかかる。ブランドサイトでは年1回の使用でよいとのことだが、実際の駆除には数カ月に1回使用するのがよいらしい。燻煙式の場合は電化製品などに対する養生が必要だがワンプッシュ式ではその必要がないとのこと。」

●第14回保土ヶ谷糖尿病ラウンドセッションから

令和6年3月5日

不眠・睡眠障害は2型糖尿病のリスク

糖尿病の発症リスクの検討。男性を対象としたスウェーデンの調査では糖尿病発症の相対リスクは、飲酒を1.0とすると、睡眠障害が4.8、肥満が6.6であった。睡眠時間が少ないと食欲抑制ホルモンであるレプチンの血中濃度が低く、反対に食欲促進ホルモンであるグレリンが高くなる。不眠や睡眠不足は摂食量の増加から肥満をひきおこし糖尿病発症のリスクになるほか、夜間のコルチゾール上昇、交感神経活性亢進からインスリン抵抗性を高め、耐糖能を減少させることも知られている。

一言コメント

「尋常性乾癬でも肥満、メタボ、脂肪肝などとの関連が指摘されている。治療抵抗性と睡眠時間との関連があるかもしれないと思った。」

●某製薬会社主催Web講演会から

令和6年3月9日

Dupilumab-associated ocular surface disease (DAOSD)の病因

デュピルマブによる結膜炎はアトピー性皮膚炎に対して使用した場合にだけ生じ、気管支喘息では生じない。使用開始から2週間程度で発症する。中等症から重症のアトピー性皮膚炎患者で、デュピルマブを投与した469人のうち、152人(32%)にDAOSDが認められた。眼疾患の既往がある患者ではオッズ比は2.97、眼科用薬の使用歴がある患者では5.16だった。発症機序に関してはIL-13のノックアウトマウスで、結膜の杯細胞が減少していたことから、杯細胞の維持には生理的IL-13が必要とされている。INF- γ 産生CD4細胞が杯細胞への分化を抑制することも、結膜炎の発症に関連している。

一言コメント

「明確なデータが示されて納得したが、一方で治療抵抗性のアトピー性角結膜炎ではIL-4/IL-13製剤による治療が期待されているらしい。」